

新埴保己一記念館をご紹介します。

本庄市で新築移転を進めていた埴保己一記念館が7月4日（土）にオープンしました。

移転前の記念館は旧児玉町により建設されて以降48年が経過し老朽化。このため、耐震性や資料の保存状況の向上、そして、来館者がより理解しやすくなることを目的として新しい複合施設アスパアこだま内に建て替えられました。

それでは新記念館についてご案内いたします。まずは、外観から…施設の外、南側には埴先生の座像があり、訪れた人を穏やかな微笑で出迎えてくれます。建物外壁は、地域の特産であった児玉瓦を模した灰色のレンガが組み合わせてあります、施設全体を上から見ると展示室は八角形の特徴的な形をしていて、そこに長方形の管理棟が組み合わされています。施設内部に入ると正面に埴先生の座像があり、その左側に展示室の入口があります。また、入口手前左側には壁掛けテレビとイスが配置され、来館者への説明に使用されています。



展示室内の様子

展示室に入ると、「埴保己一とふるさと」、「群書類従」、「和学講談所」など、テーマごとに7か所に分かれて展示され、点字表記や日本語や英語の音声説明も設置されています。リニューアルした新記念館にぜひ足をお運びください。入館無料です。

所在地 本庄市児玉町八幡山368番地アスパアこだま内

開館時間 午前9時から午後4時30分まで

休館日 月曜日（休日の場合はその翌日）及び年末年始

電話 0495-72-6032

特別寄稿 埴保己一先生史料の紹介

埴先生愛用の机について

文：公益社団法人温故学会
理事長 齊藤幸一氏

【11月末まで埴保己一記念館に特別展示しています】

和学講談所で保己一が『源氏物語』を講義していたとき、風が吹いてきてローソクの灯が消えて、本が読めなくなりました。

困った門人たちが「しばらく待ってください」と声をかけると「さてさて、目明きとは不自由なものだな」と笑いながら答えたというのは有名な逸話です。明治の版木絵師・小林清親の作である教導立志基『源氏物語講義の図』に保己一の机が描かれています。



左記『講義の図』の一部

描かれていますが、実物を見て描かれたことがわかります。

天下の大学者といわれた保己一は、常に質素儉約にして美食を好まず、服装にも関心も持たず、贅沢を好みませんでした。その人柄を偲ばせる質素な机です。この机は、代々埴家が大切に保管していましたが、明治43年、温故学会が設立されるおりに、埴忠雄氏より当会に寄贈されました。

机に向かう保己一の姿をイメージしながら、ぜひご覧ください。



机は長さ80cm×幅36cm×高さ25cm

塙保己一とヘレン・ケラー

顕彰会事業部会委員、埼玉県身体障害者福祉協会会長、
本庄市身体障害者福祉会会長 種村 朋文



塙保己一像にふれるヘレン・ケラー

表題に「塙保己一とヘレン・ケラー」と記しましたが、国も、生存年代も異なる二人が、どうして結び付くのでしょうか、そのヒントが、女史の初来日の際の温故学会での以下のコメントに見出せます。

《訳：子どものころ、母は、塙先生は私が手本とすべき人物だと話してくれました。この地を訪問し先生の像に触れたことは、今回の来日中もっとも意義ある出来事です。この使い古した机とうつむき加減の像に触っていると、先生への尊敬の念がいつそう増してきます。先生の名前がかならずや、水の流れのように、世代から世代へと受け継がれていくだろうと信じます》

(温故学会ヘレン・ケラー来訪より)



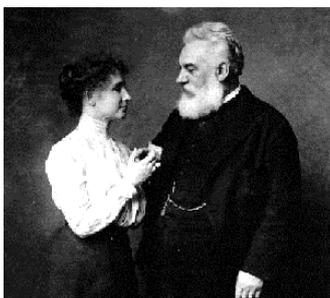
温故学会

彼女は、子供の頃より母親からの励ましの言葉として、「東洋の小さな島の日本と言う国に……」と、繰り返し保己一のことを教えられていた事が想像できます。であれば、お母様は誰よりその事を聞いたのでしょうか。そこで、彼女の伝記の中で必ず登場する人物の中にグラハム・ベルがいます。彼に関する書物の記述の中に、日本人で始めて電話を使用した人として2人の名前を見つける事ができます。

そのお一人の伊沢修二は、1875年～1878年まで、文部省派遣のアメリカ留学生でした。当時、彼はベルに、自身の英語の発音の矯正を願い出て快諾をもらっています。ベルは、電話機の発明で有名ですが、本来、三代続く聾啞教育の研究者であり、その一端の成果が電話機であり、また、発音、発声法である視話術は彼の父の考案です。伊沢は、このようなベルに発音の指導を受けながら、聴音に関する事(言語・聾啞・吃音・音楽など)に興味を示し研究をした様です。ベルは、熱心に勉強する東洋の青年に大いに好感をもち、当時研究中の電話の研究室まで入れてくれる様な親しい関係となったそうです。その様な二人の関係の内に、盲目の国学者 塙保己一の事が、グラハム・ベルに伝わり、その約9年後ケラー親子がベルを訪ね、その後、助言者として大変ベルを頼りにしていたヘレンの母ケイトに伝わったのではないのでしょうか。その裏付けとして、伊沢修二の帰国後、彼が文部省編輯局長となり教科書の編集出版行政に携わった中で、『尋常小学読本』の教材に塙保己一が登場することから、在米中の伊沢修二は塙保己一についての知識は十分持ち合わせていたと推測できます。また、ベルと伊



伊沢修二



ヘレン・ケラーとグラハム・ベル

沢の対話の中の保己一は、日本の盲目の国学者という訳だけでなく、江戸期日本の盲人の生業とか、当道座と言う教育・職業訓練・生計まで互助する集団の事など、数百年の歴史と他国に類を見ない組織化された盲目の人々の中の偉人として紹介したのではないのでしょうか、ベルはそれを興味深く聞き記憶に残した事でしょう。単に、伊沢の紹介が通り一遍、噂話程度であったとすれば、ベルの記憶には残らずヘレンの母に伝わる事は無かったと思います。此処に伊沢修二氏の多くの功績に敬服し、現代に生きる者として感謝いたします。